映画に期待する米ジャーナリスト教育

大学課程で必修科目に

佐藤成文
（在米ジャーナリスト）

「ジャーナリズム映画」のジャンル

今年五月に日本で公開されたアメリカの映画「消されたヘッドライン」は、ジャーナリズムの世界を取り上げたものとしては、久しぶりに中身の濃いアクチュアルなストーリーとして話題になった。ただし、日本語のタイトルの稚拙さが、映画が投げ掛ける〝重さ〟をはぐらかす結果となって、含蓄に富んだオリジナルタイトル「State of Play」を生かすことができなかったネーミングのまずさを浮き彫りにしたと言える。

アメリカの硬派週刊誌『ニューリパブリック』（TNR）の若手記者が半分以上の記事をねつ造し、高い評価を受けながらも、ハッカーの世界を取材した特集記事がきっかけで、ねつ造の事実が明らかになるまでの一部始終を描いた「ニュースの天才」（二〇〇三年）も、主人公スティーブン・グラスに掛けた原題「Shattered Glass」（打ち砕かれたグラス）からすると、あまりにもまとも過ぎるきらいがあり、ひと工夫できなかったかと思う。

年を重ねて何かと小言めくことが多くなり、現場取材に出掛けることもなくなった老ジャーナリストとして、「ジャーナリストと映画」という観点から、この素晴らしい映画ジャンルになじみのない方々に一興と考え、新作・旧作から幾つかの映画を紹介したい。

映画で学ぶ記者魂

アメリカの大学・大学院でのジャーナリズム学科は、インターネット時代到来で旧来型の新聞・雑誌が苦境に追い込まれているものの、日本に比べてまだまだ活力があるようだ。そこで必修とでもいえるのが、ジャーナリズムを理解するための関連映画の鑑賞だ。そこでは、ジャーナリズムの歴史と現状、ジャーナリストとしての文章作法、現役あるいは引退したジャーナリストによる講座といった履修科目と並んで、「映画を通じてジャーナリズムについて学ぶ」というのが授業に組み込まれているのが通例だ。

例えばカリフォルニア大学（UC）バークリー校のメディア・リサーチセンターでは、「映画に見るジャーナリストおよびメディア」と題する参考映画のリストを作成しており、それには、捜査当局に操られた女性記者が文字通り致命的な取材上の過ちを犯す「スクープ・悪意の不在」（一九八一年）から、インドネシアでのスカルノ大統領失脚のきっかけとなった六五年の国軍部隊によるクーデター未遂事件（9・30事件）を背景に、オーストラリア放送協会（ABC）の若手特派員の生態を描いた「危険な年」（八二年）まで、アルファベット順のタイトルで五十を超える映画がリストアップされている。

最も新しい作品が、『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙特派員ダニエル・パール記者のイスラム過激派による誘拐・殺人事件で真相究明に尽力したマリアンヌ・パール夫人に焦点を絞った「マイティ・ハート／愛の絆（きずな）」（二〇〇七年）であるため、今年の話題作「消されたヘッドライン」は漏れたとみられる。

最近の秀作は「ニュースの天才」

もっと作品数を絞ったものでは、ミズーリ州の成人教育教室でコミュニケーション課程を教えているデービッド・バートンが、〇七年夏に学生向けに「ジャーナリズムがテーマの卓越した映画27選」を紹介したものがある。

ナンバーワンは「ニュースの天才」で、以下アメリカのテレビ報道のパイオニア的存在のエドワード・マローの赤狩り時代の活躍ぶりを描いた「グッドナイト&グッドラック」（〇五年）、デンゼル・ワシントンが演じる黒人新聞記者が主役の「ペリカン文書」（九三年）、クメールルージュが制圧したカンボジアでのアメリカ人特派員と現地雇用の助手の友情を題材とした「キリング・フィ

ールド」（八四年）、ウォーターゲート事件の「大統領の陰謀」（七六年）などとなっている。

さらにジャーナリスト自身が作成した「ジャーナリズム映画」リストというのもある。コネティカット州の有力地方紙『ハートフォード・クーラント』の映画評担当のベテラン記者スーザン・ダンによるもので、トップが「消されたヘッドライン」で、以下新聞王ランドルフ・ハーストがモデルとされる、文字通りの史上最高傑作映画の「市民ケーン」、「ニュースの天才」、ベトナム戦争が舞台の「地獄の黙示録」「スクープ・悪意の不在」「大統領の陰謀」などから二十二位「ローマの休日」までが列記されている。

ワイルダーとパクラ

これらのリストを眺めると、ハリウッド映画の中でもジャーナリストやジャーナリズムを取り上げた映画が質量とも極めて充実していることが分かる。その最善の例は、「失われた週末」（四五年）、「サンセット大通り」（五〇年）、「お熱いのがお好き」「翼よ、あれが巴里の灯だ」（五七年）など数々の優れたヒット作の脚本・監督を担当したビリー・ワイルダーの作品の中で、ごくわずかな興行面での失敗作の一つだった「地獄の英雄」だろう。

大都市の大手の有名紙でらつ腕記者として鳴らしながら、酒好きで短気なため上司との関係や仕事で失敗し、流れ流れてニューメキシコ州のアルバカーキの小さな新聞社で働く記者が主役。再び大新聞で活躍することを夢見る毎日を過ごしていたところへ、インディアンの宝探しで廃坑に入り込み落盤事故で生き埋めになった男の事件に遭遇、チャンスとばかり、大事件に仕上げるというのがストーリー。

大ニュースとして連日の独占スクープ報道をするために、選挙での再選のためには手段を選ばない地元の保安官と共謀して、救出作業を長引かせなど悪らつな方法を駆使するというアクの強い役どころをカーク・ダグラスが演じている。

事故現場周辺にはクルマで見物に訪れる住民が殺到、乗り物の遊園地まで設置されるという一種のお祭り騒ぎとなるという筋書きは、「メディア・サーカス」と形容される最近のマイケル・ジャクソンの急死をめぐる報道ぶりを想起させるもので、メディアと有名人の相乗効果をシニカルに描いた時代を先取りした〝ジャーナリズム映画〟だろう。

ワイルダーが脚本も担当したこの映画の原題は「Ace in a Hole」だった。ワイルダーは落ち目の元エース記者が落盤事故を悪用して大新聞復帰を図るという意味合いも兼ねて、このようなタイトルを付けたようだ。

しかし、配給を担当するパラマウント映画の重役がワイルダーに相談せずに、もっと分かりやすい題名として「The Big Carnival」と改変して映画を公開、長年テレビでの放映でもこのタイトルが通用していた。だが〇七年に、DVD完全版が発売されるのを機会に原題に戻したというエピソードがある。

ワイルダーはオーストリア・ハンガリー帝国時代のポーランド生まれで、ベルリンで記者生活をしたこともある。ドイツでのナチス台頭で、ユダヤ人であるためにまずパリに逃れ、最終的にハリウッドで映画人として成功したわけだが、新聞記者としての経験からシャープな人間観察力を養い、自ら脚本と監督を担当することで数多くのヒット作を生む背景になったようだ。

ジャーナリストを描いて成功したハリウッドの映画監督としては、アラン・J・パクラも有名だ。前述の「大統領の陰謀」「ペリカン文書」のほかに、新聞記者が主役となって、ジョン・F・ケネディ大統領のような若手政治家の暗殺事件の背景を追及するものの、巨大な陰謀の影にのみ込まれて殺害されるという筋書きの「パララックス・ビュー」（七四年）という異色作がある。ケネディ暗殺事件にヒントを得て、「大統領の陰謀」の二年前に制作された〝陰謀スリラー〟ともいえる作品で、シアトルのスペースニードル・タワーで上院議員暗殺事件の目撃者が次々姿を消していることから、真相究明の取材に乗り出す新聞記者（ウォーレン・ベイティ）が「パララックス」という秘密暗殺組織の存在を探り出すものの、自らも暗殺者とされて闇に葬られるというストーリー。ケネディ暗殺がリー・ハービー・オズワルドの単独犯行であるとのウォーレン委員会の結論へ

の不信感を背景に、底知れない影の社会の存在を暗示する〝時代の産物〟の映画と言える。

原作に及ばぬ「消されたヘッドライン」

「消されたヘッドライン」は「大統領の陰謀」以来の優れた〝ジャーナリスト映画〟とされているが、ミステリー映画という面もあって、実際には「パララックス・ビュー」の系統に属する映画と言えるかもしれない。全体の構図が見えない陰謀の解明に向けてたたき上げの〝現場主義の記者〟が挑むという筋書きで、緊張が続く百二十分の上映時間があっという間に終わってしまうというほどの密度の濃い映画ではあるものの、ラッセル・クロウ、ベン・アフレク、ヘレン・ミレンといった大スターを起用しながらも、最終的にはリメークの域を出られず、〝原作〟であるＢＢＣテレビの「ステート・オブ・プレー～陰謀の構図」（〇三年）を超えることはできなかったとの感は免れられない。

ＢＢＣテレビ版と映画版の原題は同名で、登場人物やストーリーはもちろんほぼ同じだが、決定的な違いは上映時間が前者の場合計六回のエピソードを積み上げた三百四十二分であるのに対して、後者が百二十七分だったことだ。テレビのミニシリーズドラマは途中で時間を長引かせるために筋書きを薄めるものだが、ＢＢＣテレビ版では各エピソードともヤマ場があり、すべてのエピソードで緊張を持続させながら、じっくりと物語を展開させていくことに成功し、終末での満足感も大型テレビドラマとしては東西を問わず近年にない出色の出来となっている。これに対して映画版は二時間少々という枠内で話が急ぎ過ぎているきらいが否めない。

ＢＢＣテレビ版は本国で〇三年に初放映されて以来ミニシリーズの傑作との評価が定着、アメリカで翌年放映された際も新聞やネットなどの各メディアでも、おしなべてテレビ史上で最高レベルにランクされる出来栄えとの評判だった。

日本では昨年十月にＮＨＫＢＳ２で放映されたが視聴率は低かったようで、現時点でテレビ版を日本で鑑賞するには、イギリスあるいはアメリカで発売されているＤＶＤを購入するほかないようだ。

新聞社の理想の上司像

テレビ版と劇場映画版を通じて素晴らしい演技が楽しめるのは、それぞれの新聞社の編集局長を演じたビル・ナイとヘレン・ミレンだ。いずれもイギリス出身の俳優という共通項があり、しかも新聞経営の一端を担うという立場にありながら、〝記者魂〟にも理解を示す役どころで、どちらも役得のある演技だ。

この二人のように、ジャーナリズム映画に姿を見せる編集長、編集局長といえば、口ではうるさいことを言いながら、内心では現場記者を応援するという、脇役が多い俳優にとってはうまみのある場面が出てくる映画が幾つかある。

例えば、アメリカで記者志望の学生が増えて、ジャーナリスト専攻科が繁盛するほどの影響力があったとされる「大統領の陰謀」では、『ワシントン・ポスト』紙の伝説的な編集主幹ベン・ブラッドリーを演じたのは、年を取って渋い脇役が増えていたベテラン俳優ジェーソン・ロバーツだった。また「パララックス・ビュー」で、ベイティの上司となる地方紙の編集長を演じたのは、元来舞台俳優だったヒューム・クローニン。

これまで取り上げたジャーナリズム映画は、いずれも幾分重い感じの内容だが、もちろん、これとは正反対に娯楽作品として文句なしに楽しめるジャーナリストやジャーナリズムが主役の映画もたくさんある。

新聞記者のロマンス映画といえば、古くはクラーク・ゲーブル主演、フランク・キャプラ監督の「或（あ）る夜の出来事」（三四年）や、オードリー・ヘップバーンを一躍大スターに押し上げたグレゴリー・ペック共演、ワイルダー監督の「ローマの休日」がある。

このほかアルフレッド・ヒッチコック監督の名作「海外特派員」（四〇年）がある。第二次世界大戦直前のヨーロッパを舞台にエドワード・マローを擬したような記者が活躍するアクションスリラーだ。そして近年の映画では、〝高級紙〟『ニューヨーク・タイムズ』紙に対抗してスクープ合戦で奮闘する、『ニューヨーク・ポスト』紙を摸したタブロイド紙を舞台とした「ザ・ペーパー」（九四年）。痛快な記者魂が各所でうかがえる秀作だ。